

<原著>

## ケアマネジャーによる要介護高齢者の 心理的ニーズの把握について

### Care Manager Understanding of the Psychological Needs of Elderly Patients Requiring Care

入江 多津子<sup>1</sup>

Tazuko IRIE

1 常葉大学健康科学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Health Science, Tokoha University

#### 【要 旨】

身体的・社会的ニーズと同じように重要であるケアマネジャーによる要介護高齢者の「心理的ニーズ」の把握の尺度開発を目的に、首都圏で勤務する現役のケアマネジャー471名に、研究者自身が作成した自記式無記名質問紙による調査を実施した。研究デザインは探索的因子分析調査である。結果、ケアマネジャーが把握する心理的ニーズとは「共同体感覚因子」、「経済的因子」、「焦燥因子」に分けられた。また、ケアマネジャーの基礎資格により、年齢、性別、職種では大きな違いはなかったが、在宅介護支援センターに勤務するケアマネジャーは介護福祉士と社会福祉士・医療職の間で「経済因子」の把握に有意な差があることがわかった。

---

Key Words : ケアマネジャー, 要介護高齢者, 心理的ニーズ, 尺度開発

#### 1 研究の背景と目的

平成27年度版高齢社会白書によると、すでに日本の高齢化率は26.0%に上昇した<sup>1)</sup>。今後も団塊の世代の高齢化の進展とともに、要介護高齢者の数はさらに増加する。要介護高齢者を支える介護保険制度はこれからもその重要性は増していくと考えられる。ケアマネジャーは介護保険制度の中核的な存在であり、要介護高齢者にとってケアマネジャーによるケアプランの作成をはじめとする様々な支援は、生活を組み立てるうえでますます必要不可欠な存在となるであろう。これからは

ケアマネジャーのかかわり方や見立ての如何によって、要介護者の生活の質が大きく変化してしまうことが予想される。要介護者に対するケアマネジメントは、要介護者の生活の質へ直接作用してしまうほど重要な道標といてよいと考える。ガリア戦記の中に「人は自分が見たいように見る」というカエサル的重要な人間観察の言葉が残っているが、ケアマネジャーそれぞれも要介護高齢者に対して異なる見方をすれば、ケアプランにその差異が反映され、ケアプランの違いによって利用者は不利益を被りかねない。そのため、要介護高齢者の「心理的ニーズ」の把握を各ケ

アマネジャーができる限り等しく把握し、総合的なケアプランを立てることは、要介護高齢者の生活の QOL の保障のためには極めて重要であると考えます。本論文では、ケアマネジャーが「心理的ニーズ」として要介護高齢者のどのようなところを観察しているかを明らかにし、各ケアマネジャーの把握の差を測定できるようにすべく「心理的ニーズ」尺度を開発することを目的とする。

そこで、まず、中心主題となる「心理的ニーズ」の定義について国内先行研究を概観した。過去の「心理的ニーズ」という用語を使った研究を検索し、文中で用語が規定されているか、またどのような意味で使用されているのかについて検索を行った。結果、「心理的ニーズ」については医中誌では 21 件、CiNii では 9 件であった。「心理的ニーズ」という用語については、一般的に医療分野、教育分野など様々なところで使用されているが、その用語がどのようなことを想定して、使用されているのかについての報告は文献検索では見当たらなかった。

次に「ケアマネジャー」「高齢者」「心理」の用語では、医中誌では 141 件、CiNii による検索では 4 件ヒットした。その中で、高見ら<sup>2)</sup>による調査が本研究に近いものであったが、介護保険を利用している在宅高齢者の介護保険サービスに対する利用者評価と生活満足度との関連、さらに家族構成との関連について検討することを目的とされたものであった。これらの先行研究においては、ケアマネジャーを研究の対象とはしておらず、ケアマネジャー自身の「心理的ニーズ」の認識についての研究は見られなかった。以上の文献検討の結果、「心理的ニーズ」の明確な定義が述べられている文献は見られなかった。

ただし、ケアマネジャーの高齢者に向き合う視点の研究として、次のような研究があった。杉田ら<sup>3)</sup>は「高齢者観とは、漠然とした高齢者に対するイメージから始まり、高齢

者を生活者としてどう捉えるかであり、個人の価値観を反映しながら変容していく可能性を持つものである。」と述べている。また、手島<sup>4)</sup>は「高齢者観は、私たちの内面にある人の見方であるが、高齢者のかかわりを大きく左右する意識であると言える」と述べている。また、高齢者観に類似した概念として、『老人観』についての定義がある。佐藤<sup>5)</sup>は、老人観とは「老人を対象化したときの生物的・心理的・社会的諸側面に対する視点であるとともに、老人への対応や行動の心理的基礎をなす概念である。したがって、老人に対する態度を中核とするが、イメージ、意識、感情なども含んでおり、さらには老化 (aging) や老年期の生活をも対象とする包括的な概念である。」と定義している。

研究者は高齢者観・老人観の心理的基礎をなす見立ての重要性を認識し、心理的な包括ニーズの解明を実施するため、本研究に取り組むこととした。なぜなら要介護高齢者のケアマネジメントを行うケアマネジャーが高齢者をどのような意識しているかによって、ケアマネジャーと要介護高齢者との関係性が作られ、安定した関係は高齢者への安心感につながると考えるからである。またネットワークの核となっているケアマネジャーに要介護高齢者との関係が継続されていることは、要介護高齢者の生活の安心と安全につながると考えるからである。このことはケアマネジャーが介護保険における要介護高齢者の生活支援の重要な要になっていることを意味している。佐藤<sup>5)</sup>の老人観のとおり、老人への対応や行動の心理的基礎をなす生物的、心理的、社会的諸側面をもとに、本研究で高齢者への対応の基礎をなす心理的基礎をなすものに注目した。身近なケアマネジャーの心理的基礎をなす高齢者との見立てが、高齢者の心の安定を基盤とした生活の質を決めるからである。

よって、本研究にとりかかるにあたって、

ケアマネジャーがどのように要介護高齢者の「心理的ニーズ」というものを認識しているかが重要になって来る。ここではケアマネジャーを対象とした「心理的ニーズ」という概念規定のないニーズについて、どのような見方をしているのかについて、「心理的ニーズ」の把握のための質問紙の作成が必要であった。そのため、要介護高齢者の「心理的ニーズの把握」を調べるための尺度開発を目的に本研究を実施した。

## 2 研究方法

調査は2段階に分けて行われた。事前調査では内容妥当性のある質問項目を作成し、尺度原案を作成した。本調査では尺度原案の項目分析、構成概念妥当性や内的一貫性の検証を通じて心理的ニーズ把握尺度を作成した。さらに作成した尺度を用いて、基礎資格間で心理的ニーズの把握に差があるか否か検討した。

### 2.1 用語の操作的定義

本研究を進めるにあたり、以下の用語の操作的定義を行った。

- 1) 心理的ニーズ：ここでは高齢者が表現する身体的ニーズではなく、「自分が自分であるために心の表現としてあらわされるニーズ」と規定した。この用語の操作的定義は高齢者看護の専門家の意見を参考にした。
- 2) ケアマネジャー：介護保険法第69条で規定されている介護支援専門員のことをいう。（社会福祉小六法 中央法規 2016）ケアマネジャーという表記も文献等に散見されるが、本研究では厚生労働省の広報・会議録等で採用されているケアマネジャーの表記を採用した。
- 3) 基礎資格：介護支援専門員実務研修受講試験を受験する時に、申請する国家

資格等の基礎資格のことを言う。申請書類の記載方法に記載されているように、複数資格を持っていても、申請の基礎資格の記載は1職種を記載する。ここでは申請した基礎資格のことを言う。（社会福祉小六法 中央法規 2016）

### 2.2 研究デザイン

#### 2.2.1 データの収集方法

事前調査では、特別養護老人ホーム、デイサービス、訪問看護ステーション、高齢者サービスセンター、地域包括支援センター、在宅介護支援センター、居宅介護支援センターなどに所属するケアマネジャーを対象に自由回答方式によるアンケート調査を行った。データ収集期間は、2015年3月～5月であった。

本調査では、調査方法は機縁法により研究の承諾を得た事業所の施設長を通し、研究協力の承諾を得たケアマネジャーに直接質問紙を渡してもらい、自記式無記名で郵送により返信してもらった。調査期間は2015年6月～12月であった。

#### 2.2.2 質問紙作成までの事前調査

ケアマネジャー25名を対象に、以下に掲げるケアマネジャーが考える心理的ニーズの定義を問う質問をし、自由回答で求めた。

ケアマネジャーが把握すべきと考える「要介護高齢者の心理的ニーズ」とは、どのようなものでしょうか？ キーワードを含めて、教えてください。

有効回答数は25票（有効回答率100%）であった。それぞれの就労場所は、特別養護老人ホーム6名、デイサービス4名、訪問看護ステーション4名、高齢者サービスセンター2名、地域包括支援センター3名、在宅介護支援センター2名、居宅介護支援センター4名である。得られた回答をKJ法で分類し、心理的ニーズに関係のある文献等

から孤独<sup>6)</sup>・不安<sup>7)</sup>・離脱理論<sup>8) 9)</sup>・感情の安定・葛藤へのケア<sup>10)</sup>と構成概念を抽出し、この構成概念をもとに30項目の質問項目を作成した。

内容的妥当性を検討するにあたり、それぞれ社会学修士・社会福祉学修士・教育学修士・看護学修士の学位をもつケアマネジメントの専門家4名に質問項目の検討を依頼し、下位概念の内容を適切に反映・網羅しているか意見を求め、質問項目の表現を修正した。

表面妥当性の検討にあたり、36名のケアマネジャーに事前調査を行い、回答のしづらさや表現のわかりにくさについて意見を求めた。有効回答数33票（有効回答率92%）が得られ、これらの意見を参考に質問項目の表現の修正をした。

以上の手順を踏み、「孤独」4項目、「不安」9項目、「離脱理論」5項目、「感情の安定」9項目、「葛藤へのケア」3項目の5下位概念から構成される30項目の質問項目を心理的ニーズ把握尺度の原案とした。

### 2.2.3 本調査の調査対象

調査対象は介護保険上の業務を行っている首都圏の事業所に所属している現役のケアマネジャーに向けて600部を配布した。

### 2.2.4 本調査の調査内容

(1) 基本属性：年齢，性別，就労場所等の基礎項目を確認した。

(2) 心理的ニーズの把握：心理的ニーズ把握尺度原案を使用した。原案は5構成概念30項目から構成され「把握する必要はない(0点)」から「把握は必要不可欠(4点)」の5件法リッカート尺度で回答を求めた。

## 2.3 分析方法

分析では、基本統計量の算出をSPSS (Statistics Base Grad Pack ver24)、探索的因子分析および $\alpha$ 係数の算出を、R (version 3.3.1)で行った。分析の過程では、統計の専門家から助言を受けた。

(1) 項目分析：各項目の基本統計量を算出し天井効果・床効果を検証した。また各項目の回答が正規分布に従って得られるかをQQ-plotで検証した。

(2) 構成概念妥当性の検討：探索的因子分析を用いて、原案作成時に抽出した5下位概念と比較検討した。また因子分析の結果に基づいて下位尺度を作成した。

(3) 内的一貫性の検討：Cronbachの $\alpha$ 係数を算出し、各下位尺度の内的一貫性を検討した。

## 3 倫理的配慮

調査にあたって、各協力者の研究参加は自由意志で行った。倫理的配慮については、大学倫理審査委員会の承認（承認番号14-I0-145）を得て実施した。

## 4 結果

### 4.1 有効回答の概要

有効回答数471票（有効回答率78.5%）であった。（表1-1，表1-2，表1-3）

表 1-1 対象者の性別-基礎資格 n=471(名)

性別	男性	191
	女性	259
	無回答	21
基礎資格	介護福祉士	259
	社会福祉士	71
	医療職	57
	その他	84

表 1-2 年齢の記述統計量(基礎資格別) (歳)

基礎資格	介護福祉士	社会福祉士	医療職	全体
年齢の平均	45.34	41.47	47.98	45.36
標準偏差	8.56	7.91	11.27	9.17

表 1-3 実務経験年数の記述統計量(基礎資格別) (年)

基礎資格	介護福祉士	社会福祉士	医療職	全体
実務経験の平均	6.2	6.93	7.49	6.62
標準偏差	4.13	4.39	5.05	4.43

## 4.2 項目分析

回答の分布に天井効果・床効果が見られず、正規 QQ-plot によって回答が正規分布に従って得られていると判断した 12 項目を適切な尺度の項目として採用した。(表 2)

表 2 採用した 12 の質問項目

Q1 劣等感への理解
Q2 生活上のこまごました相談
Q3 社会からの差別された際の感情の理解
Q4 離れて住んでいる家族の話聞いてほしい
Q5 いろいろな外部の情報を知りたい
Q6 自分のことを家族の誰かに伝えてほしい
Q7 残された時間がない 苛立ち
Q8 なんでもよいからともに語りたい
Q9 生活費がなくなることからくる不安
Q10 自分がなくなった後の始末についての心配
Q11 子供との交流がなくなっていくことの孤独感
Q12 遺産・相続の相談

## 4.3 探索的因子分析に基づく因子の抽出

上記の 12 項目に対して探索的因子分析(最尤法・オブリンミン回転)を行った。ここで、共通性が 0.3 以下または全ての因子に対する因子負荷量が 0.4 未満になるような項目は削除することとした。

最初の探索的因子分析の過程で、不適切な項目と考えられる項目、「遺産・相続の相談」を削除した。残る 11 項目に対して再度探索

的因子分析を行った結果、因子数が 3 のとき因子パターン行列(表 3)の通り内容的に妥当な因子構造が得られたと考えられること、適合度指標 RMSEA が 0.077 と 0.1 を下回っていること、BIC が他の因子数に対して最小であったことから、因子数 3 に妥当性があると判断した。得られた 3 因子は 11 項目の全分散の 63% を説明した。この結果、3 因子 11 項目からなる質問項目を採択し心理的ニーズ把握尺度とした。

### 4.3.1 下位尺度の命名

得られた 3 因子を各下位尺度の質問項目の内容および因子負荷量から以下のように解釈した。

第 1 因子(5 項目)は、「劣等感の理解」に高い因子負荷量が見られ、劣等感に関する因子であることが窺える。アドラーは「劣等感」<sup>11,12)</sup>を乗り越えるには勇気付け、共同体感覚が必要であると述べている。「生活上のこまごまとした相談」「社会から差別された際の感情の理解」「離れている家族の話聞いてほしい」の項目から、共同体感覚を持つための高齢者のニーズであると考えられる。以上のことから第 1 因子を【共同体感覚因子】と命名した。

第 2 因子(3 項目)は「自分のことを家族の誰かに伝えてほしい」「残された時間がない 苛立ち」「何でもよいからともに語りたい」といった、残された時間がない中で自分の存在の証を残そうと、家族に伝えてほしいという切実な心の焦りを把握する項目から構成されている。ゆえに【焦燥因子】と命名した。

第 3 因子(3 項目)は、「生活費がなくなることから不安」が極めて高い因子負荷量を示していることから【経済因子】と命名した。

表3 因子パターン行列

項目名		共同体感覚因子	焦燥因子	経済因子	共通性
共同体感覚因子	劣等感への理解	<b>0.89</b>	-0.03	-0.01	0.75
	生活上のこまごました相談	<b>0.58</b>	-0.01	0.22	0.53
	社会からの差別された際の感情の理解	<b>0.54</b>	0.3	0.03	0.69
	離れて住んでいる家族の話を知りたい	<b>0.54</b>	0.29	0.01	0.64
	いろいろな外部の情報を知りたい	<b>0.45</b>	0.18	0.15	0.49
焦燥因子	自分のことを家族の誰かに伝えてほしい	-0.08	<b>0.78</b>	0.14	0.67
	残された時間がない苛立ち	0.09	<b>0.73</b>	0.05	0.7
	何でもよいからともに語りたい	0.12	<b>0.73</b>	-0.09	0.6
経済因子	生活費がなくなることからくる不安	0.02	-0.02	<b>0.89</b>	0.8
	自分がなくなった後の始末についての心配	-0.02	0.13	<b>0.64</b>	0.51
	子どもとの交流がなくなっていくことの孤独感	0.33	0.09	<b>0.43</b>	0.56
因子寄与率		24%	22%	17%	

ここで、さらにモデルを検証するために、確認的因子分析を試みた。「共同体感覚因子」と「焦燥因子」意見について同じような項目があるため、それでこの2項目を一緒にした2因子モデルも確認した。2因子モデルも3因子モデルも適合度はほぼ変わらない。以下が確認的因子分析の結果である。

なぜ、3因子モデルを採用したかということとを再度検討すると、事前調査でのKJ法の分類と探索的因子分析の結果が一致したためである。そのため、3因子モデルを採用し、心理的ニーズを「経済的因子」以外を「共同体感覚因子」と「焦燥因子」に分けた。

「自分のことを家族の誰かに伝えてほし

《2因子モデルのモデル検証》

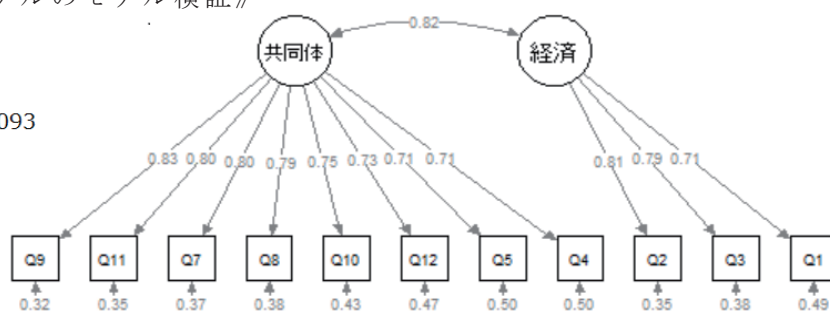
適合度指標

・TLI: 0.929

・RMSEA: 0.093

情報量基準

・9349.468



《3因子モデルのモデル検証》

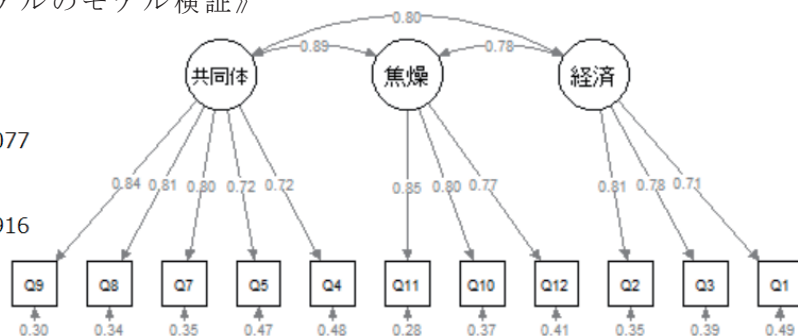
適合度指標

・TLI: 0.951

・RMSEA: 0.077

情報量基準

・BIC: 9304.916



い」「何でもよいからともに語りたい」という項目は、家族への帰属願望ニーズであると考え、家族という血縁共同体に属したいという潜在的な願望とも考えられるが、研究者の解釈は、30項目全体の中で、このニーズ因子（焦燥因子）に振り分けられた項目であるので、以下のように解釈した。「有期限である残りの時間の中で、自己の存在の意味を最も身近な存在である家族に伝えたい、自己がこの社会に確かに今、存在している実感を持ちたいということではないかと判断し、「最も身近な血族でもある家族に、自己の存在を伝えることにより、最後に自分の存在を確かに伝えたいという焦りにも似た考えではないか」と推察した。また、「何でもよいからともに語りたい」という自己の感情を放出する項目についても、「生きている感覚を自分に残された短い時間の焦りの中で、誰かに語ることによる自己存在の確認ではないか」と推察した。時間は高齢化とともにそのスピードは速く進むと言われる。その為の「焦り」の出現ではないかと解釈した。また、認知症の周辺症状に「焦燥感」は数多く出現し、多くの高齢者と接しているケアマネジャーは、認知症の症状の中の「焦燥感」に目を向けていることは確かであろうと推察した。「焦燥感」は高齢者にとっては消すことのできない感情の部分であると考え。そのようなところから、「焦燥因子」と命名した。

#### 4.3.2 因子間相関

因子間相関は以下の通りであった。（表4）

表4 因子間相関

因子	共同体感覚因子	焦燥因子	経済因子
共同体感覚因子	1	0.79	0.59
焦燥因子	0.79	1	0.64
経済因子	0.59	0.64	1

#### 4.4 信頼性の検討

各下位尺度のCronbachの $\alpha$ 係数が0.8以上の値を示した。（表5）

表5 各因子の信頼係数

因子	$\alpha$ 係数
共同体感覚因子	0.88
焦燥因子	0.84
経済因子	0.81

#### 4.5 基礎資格間の心理的ニーズの把握の差

年齢、性別、経験年数によっては心理的ニーズの把握に差は見られなかった。以下では、就労場所ごとに基礎資格間の心理的ニーズの把握に差があるか否かを提示する。

就労場所1（地域包括支援センター）では、基礎資格の間で心理的ニーズの把握の差は見られなかった。

就労場所2（在宅介護支援センター）に勤務している以下の基礎資格をもつケアマネジャーについては以下の結果が得られた。（表6）

表6 基礎資格者の数

基礎資格	人数
介護福祉士	85
社会福祉士	10
医療職	18

##### 4.5.1 共同体感覚因子の把握について

一要因分散分析の結果、基礎資格間の差に有意傾向（ $p=0.054$ ）が見られた。（表7）Holmの多重比較の結果では、各基礎資格間で把握の差について有意な差は見られなかった。これは、社会福祉士、医療職のサンプル数が少なかったためと考えられる。

##### 4.5.2 焦燥因子の把握について

基礎資格の間では把握に差はみられなかった。焦燥因子の把握には、年齢を共変量として考慮した。回帰分析の結果、基礎資格の間に把握の有意差は見られなかった。

表7 分散分析表

	平方和	自由度	平均平方	F-値	p-値
基礎資格	66.9483	2	33.4742	3.0068	0.0535 +
Error	1224.592	110	11.1327		

※ 有意水準：0.01 \*\*, 0.05 \*, 0.1 +

表8 回帰分析の結果

	偏回帰係数	標準誤差	t-値	p-値
切片	7.8161	0.88904	8.792	0.0000 ***
社会福祉士	-1.17185	0.50938	-2.301	0.0233 *
医療職	-1.51813	0.67629	-2.245	0.0268 *
年齢	0.03587	0.01874	1.914	0.0582 +
決定係数	0.1163			

※ 有意水準：0.01 \*\*, 0.05 \*, 0.1 +

#### 4.5.3 経済因子の把握について

介護福祉士が他の基礎資格より良く把握している。経済因子の把握には、年齢を共変量として考慮した。基礎資格についてはダミー変数を作成し、回帰分析を行った。結果、介護福祉士と社会福祉士、医療職との間に有意差（介護福祉士・社会福祉士： $p=0.023$ 、介護福祉士・医療職： $p=0.027$ ）が見られ、介護福祉士は他の基礎資格に比べ、12点中約1.5点ほど経済因子の把握に関する得点が高かった。（表8）

### 5. 考察

#### 5.1 心理的ニーズ把握尺度の妥当性・内的一貫性

心理的ニーズ把握尺度の妥当性は内容的妥当性・構成概念妥当性の観点から検討する。心理的ニーズ把握尺度は、事前調査の結果をKJ法で分類することにより見出した構成概念から項目を作成し、社会学修士・社会学修士・教育学修士・看護学修士の学位をもつケアマネジメントの専門家4名による質問項目の吟味を経て作成された尺度原案をもとに作られたものである。以上のことから尺

度は内容的妥当性をもつと判断した。構成概念には「孤独」「不安」「離脱理論」「感情の安定」「葛藤へのケア」を見出したが、「葛藤へのケア」に対応する項目は項目分析のうちにすべて削除された。探索的因子分析によって見出した3因子はそれぞれ、【共同体感覚因子】が「離脱理論」、【焦燥因子】が「感情の安定」、【経済因子】が「不安」の項目でほぼ構成され、ほぼ同様の構造であるといえる。以上の結果から、尺度は構成概念妥当性をもつと判断した。探索的因子分析の結果から作成した3下位尺度のCronbachの $\alpha$ 係数は0.8以上であった。この結果から尺度は内的一貫性をもつと結論付けた。3因子は11項目の全分散の63%を説明し、適合度指標RMSEAも0.077と0.1未満の値を示している。これより、心理的ニーズ把握尺度は現場での活用が可能と判断できる。

#### 5.2 心理的ニーズの定義とその因子

本研究では要介護高齢者の「心理的ニーズ」を定義した。多くの様々な文献検索では「心理的ニーズ」に関して具体的な論述はなく、心が何かしらの安定や欲求を求めるニーズであろうということが文献の文中から推察



される程度であった。このような背景から、ケアマネジャーがその業務である高齢者の心身の支援をするうえで、心理的支援の目的となる「心理的ニーズ」の把握とは一体どのようなことを指しているのかは素朴な疑問であった。ケアマネジャーにも伺ったが確証のある返答はなかなか得られず、その実態を具体的に明文化するために質問紙で「心理的ニーズ」の把握の認識を問う手段をとった。この調査の重要な点は尺度作成を通じて、ケアマネジャーの「心理的ニーズ」の認識の内容・意味を具体的に明文化することができたことである。

得られた3因子【共同体感覚因子】【焦燥因子】【経済因子】は要介護高齢者の生活時間軸で見ると、過去、要介護高齢者が成人として社会にかかわっていた生産活動が活発な成人期時代から継続している「共同体感覚」感、そして、現在の置かれている生活状況への「焦燥」感、将来、所得や貯金の不確実な「経済」不安として把握されていることが考えられた。以下では、それぞれの因子について若干の考察を述べたい。

### 5.2.1 共同体感覚因子

共同体感覚因子は「劣等感の理解」に最も高い因子負荷量を示し、一方で「生活上のこまごました相談」「離れて住んでいる家族の話聞いてほしい」「いろいろな外部の情報を知りたい」という積極的に情報を入手し、家族・社会につながりを求め活動するという適応理論<sup>13)</sup>の様相も垣間見ることができた。宮城<sup>14)</sup>は劣等感の一つとして「社会的序列（社会的地位）ゆえに出現する『役割的劣等感』」を述べており、高齢者という社会的役割から生じる劣等感の存在を指摘している。要介護高齢者は、健康な高齢者に比べると日常生活上の活動にも限界があり、老化に伴うADLの低下も相まって生産活動共同体という社会活動から少しずつ撤退を余儀なくされ

劣等感を感じている。友尻<sup>15)</sup>は「劣等感を強く感じている者の方が、自分自身の内的基準に沿って主体的に行動することは難しく、個人志向性の肯定的な側面を獲得できていない。」と述べているが、その一方で要介護高齢者は、家族とのつながりや情報を入手し、社会に適応したいとも考えている。アドラーは劣等感<sup>11)</sup>を乗り越えるには勇気付け、共同体感覚が必要であると述べていた。共同体感覚因子を把握しているケアマネジャーは、現場の中で要介護高齢者の社会活動の漸次的撤退から来る劣等感に対して高齢者の消極的にかかわりという態度を通じて向き合い、高齢者の共同体感覚にその解決を求めているのではないかと推察される。

高齢者は次第に自身で自分の壁を作り、社会からも年齢・制度による壁を作られてしまう。しかし高齢者は、加齢とともに進む健康状態の低下、家族、友人、仕事などの血縁、地縁、社縁といわれるものからの離脱といった自分の置かれている状況を鑑みた劣等感という感情への理解を求めている。情報の入手という高齢者の積極的活動の気持ちを理解し、勇気づけという情緒的サポートを通じて高齢者の共同体感覚を再確認する共同体感覚因子という心理的ニーズの把握の重要性が、ケアマネジャー全体により広く浸透されることが望まれる。

### 5.2.2 焦燥因子

焦燥因子は「自分のことを家族の誰かに伝えてほしい」「残された時間がない苛立ち」「何でもよいからともに語りたい」という項目からなる。和田ら<sup>16)</sup>は「高齢者群の主観的な時間経過は若年者群よりも速まり、主観的時間の加速化が起こっていることが明らかになった。」同じく「入院という体験によって身体、心理、社会面での主観的幸福感が低下し、時間判断に影響を与えていた可能性が示唆された。」と指摘している。焦燥因子を

把握しているケアマネジャーは、残された時間が少しずつ減り、死が間近に迫った焦燥ともいえる高齢者の苛立ちに対するケアを家族とのつながりや傾聴に求めているのではないかと推察される。

実際、高齢者にとって家族のつながりは自らの存在を強く確認できるものであり、「自分のことを家族の誰かに伝えてほしい」という気持ちの把握は焦燥感や不安の軽減において大変重要な支援となるであろう。ケアマネジャーは直接、要介護高齢者から放たれる言語・非言語に限らず心の声に耳を傾け、その人独自の重要な心理的ニーズに向き合うことが重要であろう。

### 5.2.3 経済因子

経済因子が高く因子負荷していた項目は「生活費がなくなる不安」「自分がなくなった後の始末の心配」であった。平成27年度版高齢社会白書によれば、高齢者の平均的所得は約297.3万円<sup>17)</sup>であり、今も毎年減少傾向<sup>18)</sup>にある。また小澤<sup>19)</sup>によって「高齢者世帯の55.3%は『年金のみ』で生活しており、高齢期の生活に年金が大きな役割を果たしていることがわかる」「・・・低年金者、無年金者の存在は、公的年金だけでは最低生活を確保できないことを示しており・・・生活保護は高齢者の生活を支える重要な仕組みとなっている。」と述べられている通り、主たる収入である年金だけでは生活が困窮し、生活保護を受給する者も増えている。さらに齊<sup>20)</sup>は「働く場も力もない高齢者が生活保護を脱することは難しい状況になっている。」と述べている。小池<sup>21)</sup>は「『平成26年国民生活基礎調査』によれば、調査対象となっている全ての世帯において生活が「苦しい」と回答している割合が62.4%であり、比較可能な2003年実施の同調査の53%の上昇率に寄与しているのは主として高齢者世帯なのである。・・・今日の生活困難は、特

に高齢者において一層拡大してきている。」と述べている。これまでの議論からわかるように、高齢者にとって生活不安の根底は経済面なのである。経済因子をよく把握しているケアマネジャーは、このような現状を肌で感じ、資産管理や経済的マネジメントの心配も無意識に胸中に感じているのであろう。

要介護高齢者が心豊かな生活を送るうえで、経済的側面に対する社会保障の充実は重要である。今後、ケアマネジャーは各高齢者の経済因子のニーズに合わせた具体的支援が求められていくであろう。

### 5.3 基礎資格間の心理的ニーズの把握の差

性別、年齢、経験年数については心理的ニーズの把握に差はみられなかった。これは男性だから、若いから、経験豊かだから、という理由で心理的ニーズの把握に格差が生じることではないことが調査から判明したということである。介護保険は16年目を迎え、ケアマネジャーへの研修、主任ケアマネジャーの指導の効果が徐々に出て来ていると推察する。各就労場所については、地域包括支援センターに勤務するケアマネジャーでは基礎資格間に差はみられなかったが、在宅介護支援センターに勤務するケアマネジャーでは共同体感覚因子の把握および経済因子の把握で基礎資格間に差がみられた。このことは、現在所属している就労環境によってケアマネジャーの心理的ニーズの把握の仕方が異なっていることを示唆している。就労場所の目的に応じて、要介護高齢者とケアマネジャーの関わり方が違ってくるのは必然なのであろうが詳細はまだ分からない。要因の究明は、今後の課題としてさらなる調査を必要とする。今後、就労場所における関係者の連携の輪は増々広がっていくであろう。そのためにも情報共有を密にし、要介護高齢者の欲するニーズの捉え方が偏らぬよう連携し、情報の共有をベースにケアマネジメント向上を図ること

は重要だと考える。

今回は、心理的ニーズの把握のみに焦点を絞り、要介護高齢者への支援にまでは言及しなかった。心理的ニーズの尺度を使い、各因子の把握の程度に応じてどのような具体的支援がなされているのか明らかにすることにより、要介護高齢者を支援する者の把握の共有を図ることができるようになり高齢者介護の向上に寄与できると考えている。

#### 5.4 ソーシャルサポートの重要性

心理的ニーズの各3因子を総合的にサポートするうえで、キャプランにより提唱されたソーシャルサポート<sup>22)</sup>は重要視するべきであろうと考える。ソーシャルサポートとは「社会的支援」と呼ばれ、家族、友人、同僚、専門家、などから得られる様々な支援のことである。ソーシャルサポートには、①情緒的サポート（なぐさめ、励ましなど）、②評価的サポート（サポートを受ける人の態度や問題解決手段などに対する肯定的評価）、③道具的サポート（問題解決に関する具体的・実地的な援助）、④情動的サポートの4つがある。ケアマネジャーはそのケアマネジメントの支援の中に4つの要素を持ち含んでおり、これらはケアマネジャーの業務の範疇でもありとえられる。

林ら<sup>23)</sup>は大都市独居高齢者の子どもの有無、子どもとの関係と日常生活満足度の調査から、「子どもの有無が高齢者の生活に密接に関連していること、子どもがいても子どもとの関係が断絶されることは、独居高齢者の生活に様々な困難をもたらす可能性が示唆された。独居高齢者の生活の質を高めるためには、子どものいない独居高齢者には保管システムを地域社会で作っていくこと、子どものいる独居高齢者には子どもとの情緒的連帯感を高められるような支援を配慮していくことが求められる。」と報告している。ソーシャルサポートは要介護高齢者個人ばかりの支援

ではない。高齢者の家族との情緒的つながりの調整支援は要介護高齢者の生活への取り組みの気持ちを強くする。<sup>24) 25)</sup>

高齢期には、共に生きてきた縁ある人々との別れ、共同体感覚の薄れ、人生の終末期に近づく焦り、経済の心細さを背景に、孤独・不安という大きな試練が待ち構えている。決して不安は取り去ることはできないが、今回の結果で出された心理的ニーズに対する心理的支援として、ケアマネジャーが提供する日常生活のこまごまとした相談支援が高齢者に心理的安定を促進し、今生きている実感をもたらすのではないだろうかと考える。特に独居の要介護高齢者の生活の質を高める視点でのケアマネジメントは今後とも重要となつてこよう。調査の結果から導き出された心理的ニーズの3つの因子を理解する視点を持ち、高齢者に働きかけることは高齢者の現実社会の中での存在を保障し、安心を提供するものであると考える。以上の考察から、心理的ニーズにはソーシャルサポートの提供が重要であろうと考える。

## 6 結論と課題

結果の分析により以下のことが結論として、推察された。

- 1) ケアマネジャーが把握する心理的ニーズとは「共同体感覚因子」、「経済的因子」、「焦燥因子」に分けられた。
- 2) 在宅介護支援センターに勤務するケアマネジャーは、介護福祉士と社会福祉士・医療職の間で「経済因子」の把握に有意な差があることがわかった。

また、本研究の今後の課題として、

- 1) 「共同体感覚因子」の把握については、基礎資格との間で差に有意傾向が見られたが、これは今後、より十分なサンプルサイズを得て、再調査する必要がある。
- 2) 「経済因子」は約0.1と低く、今後「経

済因子」にかかわる要因をより詳細に見つけていくことが課題となる。

## 7 結語

今後、超高齢社会を背景に、ケアマネジャーの業務は増々重要かつ具体的支援が求められていくであろう。それは要介護高齢者にとっては、ケアマネジャーのもつ資質が、好むと好まざるとにかかわらず極めて重要な身近な支援者となって来ることを意味する。

調査の分析の結果、心理的ニーズの把握について3因子が導き出されたが、人によっては片寄りが出てくることも予測される。ケアマネジャーが要介護高齢者の情報を受け止め、発せられた「心理的ニーズ」をまんべんなく把握し、心身のケアマネジメントを実施することが利用者の利益につながることもなる。ケアマネジャーは迫りくる更なる高齢社会の中で、要介護高齢者の心の安定を図るキーパーソンの重要な役割となるであろうと考えられる。

今後は結果を「心理ニーズ」の尺度として活用し、さらに研究を深め、高齢者の生活が安心できるようなソーシャルサポートが提供できることを期待したいと考える。

## 8 謝辞

ご多忙中、本研究にご協力いただきました福祉施設等の施設長並びにケアマネジャーの方々に、紙面を借りまして、心より感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 内閣府：平成27年度版高齢社会白書，2016
- 2) 高見千恵，忠津幸代・水子学：介護保険サービス利用者のサービスに対する満足度尺度の妥当性および信頼性，川崎医療福祉学会誌，17(2),343-351,2008

- 3) 杉田由香里・中川孝子・太田尚子：高齢者疑似体験演習を通しての高齢者観—レポート分析より—，青森中央短期大学 研究紀要，第27号，135-14,2014
- 4) 手島 洋：日本の高齢者観の形成と現状 人間と科学，県立広島大学保健福祉学部誌，15(1)23-34，2015
- 5) 佐藤眞一：老人観，京極高宣（監修）現代福祉レキシコン，雄山閣，334，1993
- 6) 結城康博：孤独死のリアル，講談社現代新書，p5，2014
- 7) 渡辺直樹：介護不安の軽減策：不安の構造・要因分析からの考察—当研究所「介護不安に関する調査」から—，生活福祉研究，通巻89号，28-43，2015
- 8) 中川，威：高齢期における心理的適応に関する諸理論，生老病死の行動科学．15，31-39，2010
- 9) 高坂康雅：大学生における共同体感覚と社会的行動との関連，和光大学現代人間学部紀要第5号，53-60，2012
- 10) 角野加恵子，中谷久恵，藤本比登美：認知症高齢者の家族介護者が抱いている介護へのケア感情の構造，家族看護学研究19(1)，54-64，2013
- 11) Adler.A(1932)：What Life Should to You. 高尾利数（訳），人生の意味の心理学 春秋社，東京，1984
- 12) 香川三六：アドラー心理学にみる人間観 アドレリアン第2巻第1号（通巻第3号），1-13，1987
- 13) 小田利勝：社会老年学における適応理論再考，神戸大学発達科学部研究紀要，11(2)，155-170 2004
- 14) 宮城音弥：「劣等感・その本体と克服」，東京書籍，東京，29，1959
- 15) 友尻奈緒美：劣等感とその補償について—質問紙とTATを用いた調査より—，京都大学大学院教育学研究科紀要，第57号215，211-224，2011

- 16) 和田博美・村田和香：高齢者の時間感覚に関する研究：高齢者は時間経過をどのように感じるか，高齢者問題研究，NO.17，79－85，2001
- 17) 内閣府：平成27年 国民生活基礎調査の概況，2016
- 18) 内閣府：平成27年 国民生活基礎調査の概況，2016
- 19) 小澤 薫：高齢者と所得保障，ゆたかなくらし，400号記念，高齢者福祉白書，全国老人問題研究会，97-103，2016
- 20) 斉 鋭：生活保護制度の問題点と今後の展望 香川大学 経済政策研究 第11号（通巻第12号），159-178，2015
- 21) 小池隆生：拡大する高齢者の貧困，ゆたかなくらし，400号記念，高齢者福祉白書，全国老人問題研究会，6-9，2016
- 22) 松木光子，小笠原知枝，久米弥寿子：看護理論，理論と実践のリンケージ，259，ヌーベルヒロカワ，東京，2009
- 23) 林暁淵，岡田進一，白澤正和：大都市独居高齢者における子どもの有無，子どもとの関係が日常生活満足度および全体的生活満足度に及ぼす影響，第55巻第3号，厚生指針，16－22，2008
- 24) 赤司秀明：介護における家族システムの役割と関係性の充足－高齢者虐待の事例を踏まえて－介護福祉学，8（1），43-49，2001
- 25) 清野薫子：退職後勤労者の家族および近隣との「つながり」と高齢期の健康状態に関する調査研究 2010年度 全労済協会

## ABSTRACT

With the goal of developing a measure of “psychological need” for elderly patients requiring the care of a care manager that is equal in importance to physical and social needs, researchers carried out a survey of 471 care managers currently working in metropolitan areas using a self-administered questionnaire that the researchers developed themselves. Research was designed as an investigatory factor analysis study. Results yielded “psychological need” understanding on the part of care managers to be divided into 3 groups: “separation factors,” “economic factors,” and “impatience factors.” Furthermore, although there was not a large difference between age, gender, and occupation according to care manager applicant qualifications, there was a significant difference in the understanding of “economic factors” between care welfare, social welfare, and medical treatment-type care managers that worked at in-home care support centers.

---

Key Words : care manager, elderly patients requiring care, psychological needs, instrument development